

JICA's FLASH



JICA's FLASHでは、開発コンサルタント、NGO/NPO、大学関係者など民間の方々に向け、JICA事業の最新動向、トピックなどをフラッシュしてお伝えしていきます。読者からのご意見や人物紹介なども歓迎します!

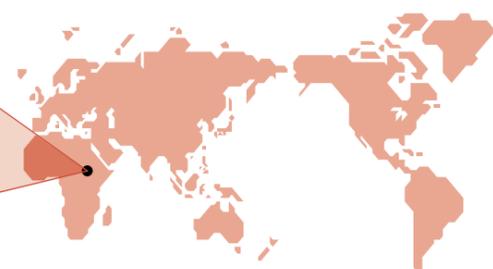
April
2012 **4**

Interview

南スーダン事務所 Republic of South Sudan



花谷 厚 所長



インフラ・人材育成の 2本柱で国造り支援

南スーダン共和国は、昨年7月にアフリカ54番目の国として独立したばかりの世界で最も新しい国です。1950年代に始まった南北スーダンの内戦が05年に終結し、包括和平合意が締結されたのを受けて、JICAは暫定自治の段階から“国造り”を支援しています。

首都ジュバを中心とするJICA事業は、①脆弱な運輸・交通網をはじめとする社会インフラ整備、②行政機能や教育・保健、産業人材を育成する「ひとつづくり」の2本柱で実施されています。職業訓練や理数科系教育、助産師養成、農村の生計向上支援などの技術協力プロジェクトは、いずれも着実な成果を上げつつあります。

先方政府の期待が高まっているのは、①ジュバ河川港改修、②ナイル架橋、

③ジュバ水供給システム改善の無償資金協力3件です。道路網の整備が遅れた南スーダンでは、白ナイル河を利用した水運が重要であり、そのハブとなる同河川港に200メートルの棧橋を建



スーダン側からジュバ河川港に到着し、家財道具の荷揚げを待つ帰還民たち

設します。ナイル架橋は、白ナイル河に唯一架かる70年代の簡易橋に替わる新橋を建設するものです。また、最大人口80~110万人と言われるジュバで、住民の数%しか安全な上水を利用できない現状を改善するため、浄水場拡張や給水管敷設を進めます。いずれも現地の人々の生活向上に大きく寄与するものと期待されます。

自衛隊の南スーダン国連平和維持活動(PKO)参加も、大きな話題になっています。陸自施設部隊は道路・橋梁建設を中心にインフラ整備に取り組む方針とのことで、当事務所もJICAの事業内容を説明するとともに、道路網や河川港の現状について情報提供するなど協力しています。PKO活動との連携を密にして、支援の相乗効果を上げるとともに、“日本の顔”をアピールしていければと思います。

一方、新国家建設の道程は決して平坦ではありません。南スーダンは石油生産が国内総生産(GDP)の7割、国庫歳入の98%を占めますが、スーダン側との原油通過料をめぐる交渉が難航し、南スーダン政府は石油採掘を停止しました。このため、国の開発予算が

大幅削減されたり、外貨収入が途絶えインフレが懸念されるなど、これまで積み上げた努力が損なわれかねない状況にあります。これが政治・社会不安に拡大しないよう最大限の配慮が求められています。

私は復興途上にある国では「ひとりが100ドル出すより、10人が10ドルずつ支援することに意味がある」と考えています。より多くの国々や国際機関に支えられているという事実がメッセージになるからです。そういう意味でも、日本が国際社会の一員として貢献することには、大きな意義があると思います。もうひとつ、生活が良くなったことを人々が実感できる、目に見える成果を示すことも大切です。

困難な課題はありますが、事務所員が丸となって、国造り支援という意義深くチャレンジングな仕事に取り組んでいきたいと思っています。

北部の都市マラカルで 総合開発計画策定支援

スーダンと国境を接する南スーダン北部のアップーナイル州都マラカルで、JICAは「社会経済インフラ総合開発及び緊急支援計画策定プロジェクト」(開発計画調査型技術協力)を今年2月にスタートしました。人口約13万人の同市のマスタープラン策定を目指す2カ年の事業で、ジュバを中心に実施してきたJICAによる復興支援の地方展開として、大きな意味を持っています。

具体的には、「安全な水へのアクセス改善」「運輸交通」「生計手段の確保」「電力」「公衆衛生」「保健」「教育」の7分野で、2022年を目標としたインフラ総合開発計画作りを進めます。併せて、緊急性の高い案件3~4件についてパイロット事業を実施するとともに、同州政府職員に対する現場での

OJT、本邦・現地国内研修を行い、行政能力強化と人材育成に取り組みます。

南スーダンは長年にわたる紛争の影響で、ハード・ソフト両面の開発が遅れていますが、2005年の包括和平合意以降、治安が比較的安定したジュバに各ドナーの支援が集中し、地方との格差が問題化しています。かつて南スーダン3大都市のひとつとして発展していたマラカルは、紛争中にインフラが荒廃し、多くの人材が国内外に流出してしまいました。市内には舗装された道路がほとんどなく、社会インフラや行政サービスは極めて貧弱である一方、多くの帰還民が流入して市街地が無秩序に拡大しつつあり、早急に適切なマスタープランを策定することが求められています。

JICAはマラカルでの事業を通して、南スーダン全体のバランスのとれた復興・発展に貢献していきます。

Professional Partner

保健人材の育成を通じて 南スーダンの国造り支援



(株)ティーエーネットワーキング
海外プロジェクト部
笠原 光さん
KASAHARA Hikaru

昨年7月に独立したばかりの南スーダンで、JICAによる「戦略的保健人材育成プロジェクト」(2009~12年・技術協力)に携わっています。私が担当しているのは、首都ジュバの保健省と各州保健局の研修運営能力向上支援、開発パートナーを含めた保健人材育成に関わるステークホルダーのネットワークです。このうち研修運営能力向上では、「計画~実施~モニタリング・評価~報告・フィードバック」のサイクルに沿って研修を運営する「研修サ

イクルマネジメント」(TCM)手法を活用し、琉球大学医学部の専門家の協力を得ながら、現役助産師の研修をサポートしています。

20年余りに及ぶ内戦を経て独立した南スーダンは、医師や保健師・助産師などの人材が極度に不足しており、妊産婦や乳幼児死亡率は世界最悪の水準と言われます。社会資本の乏しさも想像以上で、プロジェクト運営に当たっては日々、何をすることも忍耐強さが必要だと痛感しています。

国際協力の世界に興味を持ったのは、アジアを旅していた大学時代です。卒業後にJICAの短期インターンを経て英国留学し、ジェンダーと識字を学びましたが、いろいろな国の留学生から日本の政策を尋ねられてうまく答えられず、まず国内を知ろうと考え直しました。そこで日本のジェンダー・人権・平和問題などに関わるNGOに勤務し、ワークショップ運営などの業務に約10年取り組んで経験を積んだ後、縁あって海

外の現場に転じました。

開発コンサルタントの仕事は、プロジェクトデザインと現地の実情の間で、可能な帰着点を考えながら運営していくことに、困難さとやりがいがあると思います。プロジェクトデザインを“登山地図”にたとえると、南スーダンのような国では“吹雪”や“崖崩れ”のリスクを予見しつつ、目的地にたどり着く経路を見出さなければなりません。このまま進むのか、予定経路を見直すべきかを日常的に考え、つくづく“プロジェクトは生き物”と感じます。

NGO勤務を通じて学んだ手法の中には、海外でも活用できる知見が豊富に蓄積されています。国内の活動と国際協力それぞれに関わる方々が、より有機的に結び付けば、面白いことができるのではないかと考えています。

独立行政法人 国際協力機構
〒102-8012 東京都千代田区二番町5-25
二番町センタービル
<http://www.jica.go.jp>